

## 巻頭言

\*

# 間違いないと思った時でも 2～3割の疑念を持つことの勧め



池澤善郎

—自分に疑いを持っている人はあまり悪行は犯さない。自分が正しいと思っている人たちが災害をもたらすと思う—  
(塩野七生の言葉から)

私の好きな言葉「賢者は歴史に学び、愚者は経験に学ぶ」とは、ナポレオン3世が率いるフランスとの普仏戦争に勝利して諸邦に分裂していたドイツをプロイセン帝国として統一に導いたかの有名なプロイセンの名宰相ビスマルクの言葉ですが、皆さんご存知のイタリアの歴史に詳しく、初めての書き下ろし長編歴史小説『チェーザレ・ボルジアあるいは優雅なる冷酷』で1970年に毎日出版文化賞を受賞してから、『イタリアだより 君知るや南の国』（文藝春秋、1975）、『イタリア共産党讃歌』（文藝春秋、1976）、『コンスタンティノーブルの陥落』（新潮社、1983）、『ロードス島攻防記』（新潮社、1985）、『レパントの海戦』（新潮社、1987）、『ローマ人の物語』（新潮社、全15巻）、最近では『十字軍物語』（新潮社、全4巻）と、相次いで地中海世界の歴史を書き続けている塩野七生は、ビスマルクの言葉を引用しながら、「人間は歴史から何も学んでない。相も変わらず失敗ばかり」と話し、なお続くキリスト教とイスラム教の対立に十字軍の歴史を重ね、次のようなことを述べております。即ち、「自分に疑いを持っている人はあまり悪行は犯さない。自分が正しいと思っている人たちが災害をもたらすと思う」と述べ、その具体的事例として、8度にわたる遠征で最も悲

惨な結末を招いたのは、フランス王ルイ9世が率いた第7次十字軍で、熱心な信者だったルイは、キリスト教徒の血を流してこそ聖戦というローマ法王の言葉を率直に受け止め、無謀な行軍で惨敗し、大きな犠牲を払います。これに対して、理想のリーダーはイギリス王リチャード1世「獅子心王」で、彼の第3次十字軍は交渉でキリスト教徒の巡礼を認めさせ、戦略的思考と前線に切り込む勇気を併せ持ち「勝つべくして勝った男」と評されます。居眠りして捕まりそうになる場面がありますが、「俺たちがいないと、と部下に思わせるのが一番強いリーダーであり、完璧な人はだめです」と述べています。

こうした歴史から、私達の日常診療に何か学べることはないだろうか？ 私は、常々、診療に際して、病気の捉え方・理解・診断などにあまり確信を持たないようにすることが大切と考えています。間違いないなと思った時でも2～3割の疑念を持つようにしています。と申しますのは、私達の体において繰り広げられる病と健康の営みは極めて豊かなものであり、私達凡人がそうやすやすとその核心を把握することはできないことが多いので、間違いないなと思った時でもそれに2～3割の疑念を持つくらいの方が、その後の病状の変化に柔軟に対応し易いと考えからです。

(平成25年4月19日

熱海病院の私の部屋にて春の日差しを浴びて薄いもやにけむる初島を眺めながら)